

The 10th anniversary

CRN YEAR BOOK

Annual Report of
Child Research Net
FY2005

2006



巻頭対談

経済学と子ども

子どもを粗末にしない国にしよう

～社会的共通資本の視点～

Economics and Children

The perspective of social common capital
for a nation that values children

宇沢弘文 × 小林 登

A Dialog between Dr. Hirofumi Uzawa and Dr. Noboru Kobayashi

サイバー子ども学研究所

CRN

チャイルド・リサーチ・ネット

設立10年を振り返って

CRNが設立されてから10年になる。あつという間であつたが、この間の社会環境は、経済不況とは言われながらも、豊かさを増した。しかし、個人個人によって異なり、豊かさの格差は大きくなったと言う。その豊かさを支える科学技術、特にInformation Communication Technology (ICT)の発展は目覚しく素晴らしいが、それは逆に、子ども問題 "children's issues" は増加すると共に悪化しているように見える。しかし、それは子ども達だけの問題でなく、大人についても言えることで、社会一般の問題であることは、新聞・テレビなどの報道を見れば明らかである。子どもはむしろ、その被害者とさえ言えるよう。

これからの10年は、そのICTに強く影響されて、社会生活も変わることは確実ではなからうか。CRNも、新しいICTを生かす方法を考えなければならぬ時にある。

しかし、われわれの扱っている育児・保育・教育には、不易の部分と、時代によって大きく変わる部分とがある。不易な部分は、人間の、そして子どもの生物学的側面と関係し、変わる部分は社会的、文化的側面と関係すると考えられる。その不易の部分の本質を捉え、われわれは育児・保育・教育の在り方を、時代に合わせて変えて行かなければならない。そのためにCRNは、社会の中で揺れ動く育児・保育・教育の在り方のセンサー役を果たし、解決すべきテーマを洗い出し、明らかにする責任がある。

CRNを利用して下さる皆さん、お互いにチームを組んで、その責任を果たそうではありませんか。

CRNの活動理念

■ CRNは

子どもに関心をもつ
さまざまな分野の人々が、
既存の学問の枠を超えて、
学際的に語り合う
対話の場をめざします。

■ CRNは

「子ども学」の考え方にに基づき、
子どもの生物学的存在と
社会的存在について
探究していきます。

■ CRNは

インターネットを通じて、
子どもについて研究する
世界中の人々と交流をはかり、
情報や知恵を交換していきます。

Thoughts on CRN's First Decade

The decade since CRN's founding has passed quickly. While society has grown wealthier overall despite the economic recession, disparities on an individual level are widening. Prosperity has spurred development in science and technology, in particular, in information communication technology (ICT), but children's issues remain unresolved and continue to grow more serious. It seems that children always bear the brunt.

During the last decade, our world has been profoundly changed by ICT, not just by the Internet, but also by mobile communications with voice and text, and now camera functions. We expect more advanced ICT and further social changes in the decade to come. One task for CRN will be to find ways to use this new technology to improve the lives of children.

When addressing child-raising, day care, and education, our areas of concern, CRN considers children's lives in both their unchanging and changing aspects, namely, their biological development as well as socio-cultural elements that vary according to the changing times. Considering children from both biological and social perspectives, we work to solve specific issues that emerge in a particular era. It is our responsibility to remain watchful and sensitive to changes in areas that affect children and identify possible solutions. We hope that, together with our users, we can continue to fulfill this responsibility to children.

◇ CRN's Aims ◇

- Bringing together people concerned about children and offering a forum for innovative interdisciplinary discussion
- Pursuing the happiness of children from the biological and social perspectives of *Kodomogaku* in its consideration of children
- Exchanging information and knowledge on the Internet with child experts and researchers worldwide

C O N T E N T S



巻頭対談

経済学と子ども

子どもを粗末にしない国にしよう

～社会的共通資本の視点～

Economics and Children

The perspective of social common capital for a nation that values children

宇沢弘文 × 小林 登

A Dialog between Dr. Hirofumi Uzawa and Dr. Noboru Kobayashi

2

CRN 10年のあゆみ

History of the past 10 years

10



子ども学研究

中国語版開設後の「児童科学」

Child Science Research

Expanding Child Science with Chinese-language Website

12

子どもとメディア研究

インターネットの中の子どもたち

Research on Children and the Media
Children on the Internet

14

Webコミュニティ研究 情報発信方法の多様化

Web Community Research
New Information Technologies

16

トピックス 第2回子ども学会議開催「多文化社会と子どもたち」 ～未来をつくる共生と支援～

Topics : Second Annual Conference of the Japanese Society of Child Science
Multicultural Society and Children: Coexistence and Support for the Future

18

これからのCRN／読者より

Research Plans for FY2006／From our readers

20



も

CRN
YEAR
BOOK

Annual Report of
Child Research Net
FY2005

◀

2006

じ

経済学と子ども

子どもを粗末にしない国にしよう

～社会的共通資本の視点～

Economics and Children

The perspective of social common capital
for a nation that values children

A Dialog between Dr. Hirofumi Uzawa, economist,
and Dr. Noboru Kobayashi, Director, CRN

子ども問題はいまや先進国の共通の課題。社会そのものが子どもたちの生命の輝きを蝕んではいないかを検証する必要に迫られています。世界全体が市場原理によって支配される時代に危機感を覚え、「社会的共通資本」という概念によって、新たな経済原則を提唱する経済学者の宇沢弘文さんにお話をうかがいました。

宇沢弘文
(経済学者)
×
小林登
(CRN所長)

官僚任せにしないで
公の資金を有効に使う

宇沢 今日はどうしようかと困ってしまったてね。子どものことと言っても、小林さんの前で偉そうに話すわけにはいかないし。
小林 いやいや宇沢さんには教わりたいことがたくさんありますよ。

Noboru Kobayashi

小林 登(こばやし・のぼる)
CRN所長。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。日本子ども学会代表。一九二七年東京都生まれ。一九五四年東京大学医学部卒業。医学博士。著書には小児科学の専門書のほかに、「ヒューマン・サイエンス」(中山書店)、「子どもは未来である」(メディサイエンス社)、「育て育てるふれあいの子育て」(風潮社)、「風韻怎思(ふういんしんし)」(小学館)など多数。





Economics and Children:

The perspective of social common capital
for a nation that values children

Today, problems pertaining to children present a challenge common to all advanced industrial nations. We are confronted with the task of examining whether or not our society itself might not be preventing our children from having a rich childhood full of hopes and dreams. We sought the advice of the renowned economist Hirofumi Uzawa. Alarmed at the global dominance of market principles, Dr. Uzawa has proposed a new concept of the economy based on social common capital.

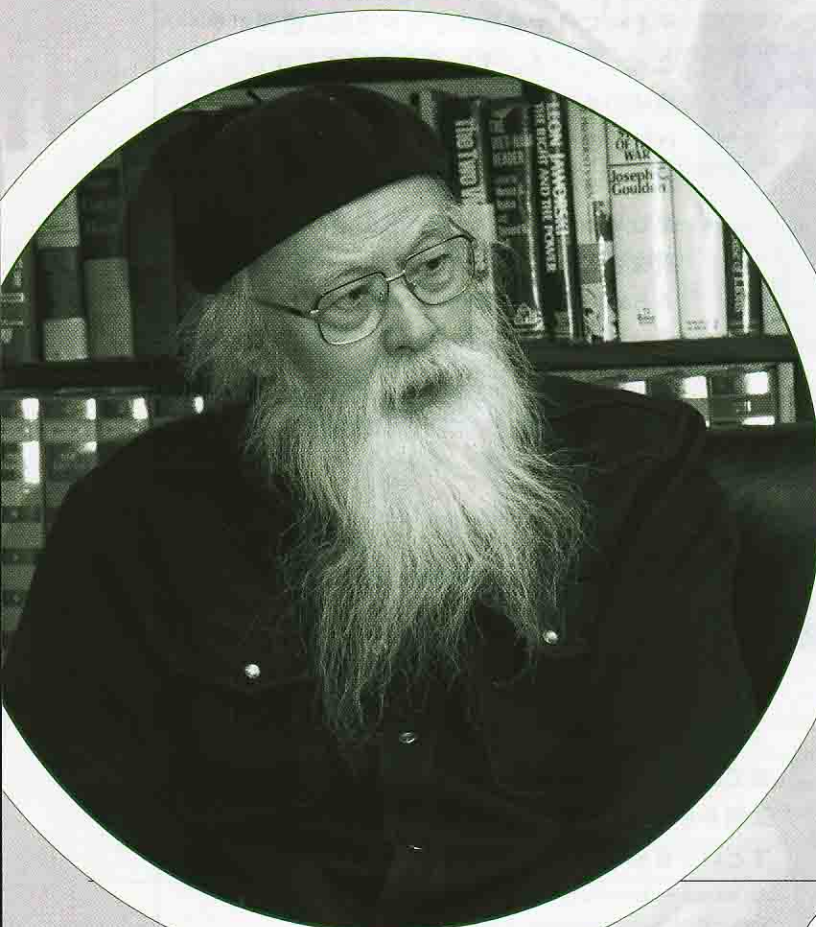
Using public funds effectively without leaving it up to bureaucrats

Kobayashi: Today, I'd like to hear your firsthand comments on the issue of children from an economist's point of view. For many years I have been under the impression that in Japan the state budget allocated for children is too small, disproportionately scanty in comparison with the budget for the aged.*1 That's very disturbing.

UZAWA: Japan's postwar society succeeded in achieving remarkably high economic performance, but the importance given to human values has consistently declined. One result is today's relatively low state budget for children. I have lived in many different countries, so I can tell you that Japan, compared with other countries, has become a leading nation in neglecting children. Sad, isn't it?

*1

For instance, according to the report released by National Institute of Population and Social Security Research last year, the percentage share of the social security expenditure for elderly (i.e. retirement pensions, medical care, welfare services) in FY2003 was over 70% while the share of expenditure for children and their family (i.e. child allowance and childbirth allowance) was only 3.8%.



宇沢 小林さんとは一高時代からの仲ですから、堅苦しくやる必要はないですよ。ワインでも飲みながら気楽にやりませんか。

小林 いいですよ(笑)。今回はあなたのご自宅にお邪魔したわけだし、あなたのペースで進めてくださいよ。

宇沢 ホッとしました。じゃあ、そうしましょう。小林さん

とは昔から馬が合うので安心なのですが、型にはまった雰囲気はどうも苦手でね。それで、今日は何について話せばいいのですか。

小林 今日はあなたのご専門の経済学という視点から子どもを見ると、どんなことが言えるのかをお聞きしたくてやってきました。私はかねがね思っているのですが、日本は子どものため

に国家が負担する予算があまりにも少ない。老人に使うよりもはるかに少ない*1。そのことが大変気になっているのです。

宇沢 戦後の日本社会は経済的なパフォーマンズは大変高くなったけれど、人を大切にしようとする姿勢がどんどん弱まってきたと思います。そのことが子どもに使う予算の少なさにも表れているのではないですか。

Hirofumi Uzawa

宇沢弘文(うざわ ひろふみ)
同志社大学社会的共通資本研究センター長。日本学士院会員。東京大学名誉教授。一九二八年鳥取県生まれ。一九五二年東京大学理学部数学科卒業。専門は経済学。一九五六年から十四年間スタンフォード大学やシカゴ大学などアメリカの大学で教鞭をとる。一九九七年文化勲章を受賞。「社会的共通資本」という考えから、環境問題、子どもの問題などについてさまざまな提言を行う。著書に「ゆたかな国をつくる」(岩波書店)、「経済学と人間の心」(東洋経済新報社)、「社会的共通資本」(日本の教育を考える)(ともに岩波新書)など多数。

*1 たとえば、2005年に国立社会保障・人口問題研究所が発表した、2003年度に支払われた日本の社会保障給付費の使途によると、年金や医療、介護などの高齢者への給付費が全体の7割を超えている一方、児童手当や出産関係費などの子どもや家庭関係の給付費は全体の3.8%にとどまっている。

私はいろいろな国で暮らしてきましたが、諸外国と比較しても日本は子どもを大変粗末にする国になってしまいました。悲しいことですね。

小林 子どもたちの環境を良くしようと思ったら、お金を出すのは当然のことでしょう。

宇沢 確かにそうですし、問題は予算の多い少ないだけではなくて、どのような考え方のもとにお金を使うのかという、質の問題も大きいと思います。

小林 予算が少ないだけではなく、使い方もよくない。

宇沢 日本は政府の自由になるお金が大きすぎて、志の低い官僚たちが好き勝手に箱物づくりなどをしてしまいます。ちっとも有効な使われ方がなされていない。官僚任せにしないで、子どもの幸せを守ろうとする人々の考え方がきちんと反映される仕組みがないとダメだと思います。

例えば、アメリカなどでは、大学の基金の半分は民間の遺贈によるものです。欧米では相続財産を遺贈すると非課税になり、寄附をした人の気持ちを大切にしたい資金運営が行われています。また、最近EUではハンガリーで始まった1%ルールというものが広まって、自分が共感できる大学や病院などに申告

所得税の1%を寄附できる仕組みが出来上がっています。気持ちのこもったお金を志の高い目的に使うことができるのです。

日本でも明治の初め頃には、小学校をつくるために村の人が森林を学校林として提供して、その林の木材で校舎を造ったり、必要な資金を得るために使いました。それで小学校でも立派な校舎をもった学校があったのです。

小林 長野県などには、明治の頃のりっぱな小学校の校舎が残っていますね。

宇沢 そうです。あの頃の方が、よっぽど子どもたちのために公の資金が有効に使われていました。税金だけが公の資金ではないのですから、日本人は官僚がすべてを決めていくことにもっと危機感を持つべきですね。

「社会的共通資本」は世代を超えた財産

小林 宇沢さんは「社会的共通資本」という考え方のもとに経済を考えておられて、そこで教育や医療について触れられていますね。これはどういう概念ですか。

宇沢 一言で言えば、「誰にとっても等しく大事なものを」「社

宇沢弘文さんの数学入門書

子どもには生まれつき数や空間の直観がそなわっている。その力を大切にしながら、興味のもてる問題をひとつひとつ解いていけば、数学の力は自然に身につくというのが宇沢さんの数学観。難解な問題ではなく、楽しめる例題が子どもたちの数や空間への興味を広げてくれます。

A Basic Introduction to Mathematics

All children are born with the innate ability to grasp numbers and spatial concepts. These books are designed to stimulate this ability so that children progressively develop math skills as they work through each series of problems.

『好きになる数学入門』（全6巻／岩波書店）

中学1年生から高校3年生までを念頭に入れた上級編。解析幾何、線形代数、微分法などのタイトルが各巻に並びますが、数学を体系的に解説するのではなく、さまざまな例題を解きながら自然に身につけていきます。最終巻の最後の章では、太陽と惑星の運動に関するケプラーの法則からニュートンの万有引力の法則を導き出すという有名な命題を証明します。

An Advanced Introduction to Mathematics for Junior and Senior High School Students. 6 vols.

『算数から数学へ』（岩波書店）

数学の学習の入り口に立つ、小学校高学年から中学校低学年に向けての入門書。方程式と幾何の考え方の基本を、算数から発展させながら、楽しく学びます。

An Introduction to Mathematics for Grades 5 to 7





Economics and Children:

The perspective of social common capital for a nation that values children

Kobayashi: If the state wants to improve the environment of children, it should first make financial outlays for it, right?

UZAWA: I agree, but the crux of the problem is not the amount of the outlay, but the purpose of the allocation and the idea behind how it should be spent. Quality, not the quantity, is the question.

KOBAYASHI: In reality, not only is the budget low, but the way it is spent is also questionable.

UZAWA: In Japan, the amount of money at the government's disposal is so great that bureaucrats of lesser virtue can easily waste it on superfluous and grandiose construction projects. Our money is not spent efficiently at all. We have to stop letting bureaucrats do whatever they like, and instead work out an effective system that caters to people's demand to safeguard the well-being of children.

In the United States, just to give you an example, about one half of university endowment funds come from private bequests. In Europe and North America, bequests are exempt from estate taxes and managed in accordance with the wishes of the individual donors. Similarly, the so-called 1% Law, which originated in Hungary, has spread throughout the European Union. It allows taxpayers to make a donation of up to one percent of their income tax to an eligible NGO or a listed public cultural institution of choice. In this way, people can put their money to use in ways that are meaningful to them and beneficial to society.

In Japan, too, at the beginning of the Meiji Era, villagers used to donate their common woodland to build elementary schools. Lumber from these woodlands was used to construct school buildings or raise the funds needed. That's why elementary schools then were sometimes housed in impressive buildings.

Social common capital as shared assets over generations

KOBAYASHI: Dr. Uzawa, your economic approach focuses on the notion of social common capital, and you refer to education and medical care in that context. Could you explain it more?

UZAWA: Briefly, it refers to "something equally precious to everybody" that should be carefully protected as "common property of society." Today, even students of economics tend to regard it as a discipline that merely deals with the pursuit of market profitability. They forget about such concepts as the fair distribution of wealth or eradicating poverty, although they have always been a part of classical economics.

We can think of social common capital in terms of three main categories: the natural environment, social infrastructure, and institutional capital. Both education and medical care belong to the category of institutional capital and are deemed necessary for the all citizens to maintain human dignity and exercise civil liberties to the maximum degree. Above all, it is important to keep in mind that social common capital belongs not only to our generation, but also to following generations.

KOBAYASHI: Three years ago, we established an academic society called the Japanese Society for Child Science. It is an interdisciplinary association of people who want to improve the environment for child development. Members of this association are dealing with "Child Caring Design," a key concept that includes all issues relevant to children, such as city planning and design, as well as social institutions and industrial planning.

会にとつての共通の財産」として大切にしようということですが。いまは経済学を志す学生でも、経済学というと市場での営利追求のことだけを論じるものと考えていて、分配の公正や貧困の解消などを忘れていますが、もともと経済学の考え方に中にも古くからある概念のひとつです。

具体的には、「自然環境」「社

会的インフラストラクチャー」「制度資本」の三つの大きな範疇に分けられます。教育や医療は、制度資本のひとつであり、どちらも一人ひとりの市民が人間の尊厳を保ち、市民的自由を最大限に享受するために必要不可欠なものと考えています。とくに重要なのは、「社会的共通資本」は自分たちの世代だけではなく、次の世代にも残さな

ければならないものだということです。
小林 実は、私は三年前に「日本子ども学会」という新しい学会を立ち上げました。子どもの成育環境の向上を願う人々が集まって、学際的に話し合おうという学会です。その中に、「チャイルド・ケアリング・デザイン」という、子どものための都市計画や環境づくり、社会制度

や産業のあり方について論じるためのコンセプトを設けています。
日本は子どもを大切にしているというのには、宇沢さんのおっしゃる通りで、それを学問的な立場から解決していくにはどうしたらいいかを、私も模索している最中です。子どもが伸び伸びできる環境を、社会の構築の仕方から考えていきたいと

思っているのです。

宇沢 すばらしいですね。小林さんはかつて東大時代に優れたクリニックをおつくりになった。喘息の子どもたちのために、周りの環境も考慮に入れた、対症療法的でないクリニックです。あれには感動しました。そういう良心的な活動をする人々の思いをきちんと反映させるための社会的装置が「社会的共通資本」なのです。

小林 宇沢さんに誉めていただくのは大変光栄ですね。ところで、この「社会的共通資本」を管理するのは誰のですか。公的機関ですか。

宇沢 それが大変重要な点です。「社会的共通資本」は社会全体の共通の財産であり、人間が人間らしく生きていくために必要不可欠なものですから、利潤追求の対象として市場的な条件に左右されたり、国家の統治機構の一部として官僚的に管理されてはなりません。

例えば、難病の子どもたちへの医療をコストの観点だけから考えることなどできませんし、人間的な対応が不可欠のケアを、政府によって規定された基準やルールによってマニュアル化することもできません。医師が必要と感じた医療は、コストや管理制度にとらわれることなく、適切に実施しなくてはならないはずです。

これは教育もまったく同じで、子どもへの投資がどのように経済的に社会還元されるかという観点から教育を考えてはいけないし、多様な子どもたちの個性を官僚的な画一化したカリキュラムによって管理してはならないと思います。教師がその子どもの資質を伸ばすために必要だと思うことは、すべてやればいいのです。

つまり、「社会的共通資本」は、それぞれの分野の専門家たちの知見や職業的規律に基づいて、国家からも市場からも独立した形で、市民の基本的な権利の充足という見地だけから運営管理されるべきなのだと思います。

安倍能成先生の演説に 深い感銘を受けた

小林 宇沢さんの言われるように、専門家の知見や職業的規律が大切だとすると、その専門家を育てる高等教育機関の役割が、大変重要になってきますね。

宇沢 おっしゃる通りです。小林さんと一緒にいると、どうしても昔話をしたくなるので

安倍能成校長
Mr. Nosei Abe
昭和15～21年在籍



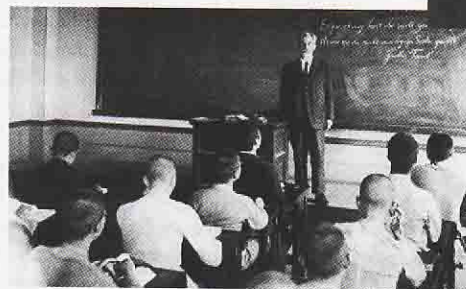
すけど、戦後マッカーサーが厚木に降り立つてすぐの頃に、一高にジープで占領軍が来たことがあったんです。小林さんは、まだ一高にはおられなかったですね。

小林 私は翌年ですね。

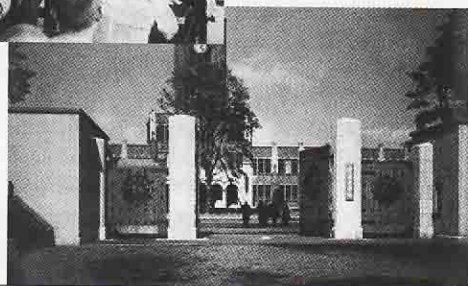
宇沢 では、見ておられませんか。一高を占領軍の施設として接収するために来たのです。

その時に校長だった安倍能成先生が、その占領軍に対して、「この一高はリベラルアーツの学校である。リベラルアーツとは人類が残してきた芸術、文化、学問のことであり、ここはその偉大な遺産を次の世代に伝える sacred place (聖なる場所)だ。そこを占領などという vulgar (世俗的) な目的のために使わせるわけにはいかない」と言って、追い返したのです。私は深い感銘を受けましたね。

教室風景



駒場、時計台



第一高等学校ホームページより
<http://www6.ocn.ne.jp/~kohryoh/>



子どもを粗末にしない国にしよう

～社会的共通資本の視点～

Economics and Children:

The perspective of social common capital
for a nation that values children

You are quite right, Dr. Uzawa, in pointing out that Japan cares very little for children. That's why I am currently searching for ways to tackle this problem from a scientist's point of view. I want to trace back the problem to the very root, namely to discuss how we can create a society that assures an optimal environment for child development. By the way, let me ask, who is supposed to manage this social common capital? A public institution?

UZAWA: That's an important point. Social common capital consists of the common property and assets of an entire society that are necessary for people to live like human beings. As such, it should not be subject to the vagaries of the market in the pursuit of profit nor should it be administered perfunctorily as part of the mechanism of state administration.

For instance, you cannot regard the medical care needed for children suffering from incurable diseases as merely a cost factor. Nor can you make a manual that standardizes the type of care that requires intricate human interaction in terms of rules laid down by the government. Whatever medical care the doctor considers to be necessary ought to be adequately provided, regardless of the cost and the administrative measures involved.

The same applies to education: In my opinion, society cannot consider education simply in terms of the return on its investment in children. Nor should the wide diversity of individuality of children be controlled through a uniform and bureaucratic curriculum. The teacher ought to do whatever he or she deems necessary to enhance the child's capabilities.

In other words, social common capital must be managed and administered on the basis of knowledge and professional discipline of experts in relevant fields, independently of state and market control, that is to say, purely from the standpoint of providing fundamental civil rights.

Deeply moved by Nosei Abe's words

KOBAYASHI: Given that expert knowledge and professional discipline, as you say, are indispensable, then institutions for higher education come to bear a very important role in fostering such experts.

UZAWA: I recall a scene just after the end of the World War II when the officers of the Occupation Army came to the First Imperial High School in Tokyo to requisition the school facilities for their headquarters. Mr. Nosei Abe, then the school principal, firmly refused, saying, "Our school has a mission to teach liberal arts. Liberal arts are the arts, culture and learning that are legacies of humankind. This is the sacred place where these great legacies are passed on to future generations. It cannot serve such a vulgar purpose as military occupation!" I was deeply moved by his words then.

KOBAYASHI: Mr. Abe was, indeed, a man of great dignity. Later, he was appointed Minister of Education in the administration of Prime Minister Kijuro Shidehara.

UZAWA: Mr. Abe was a remarkable person. I guess, he was then already thinking on behalf of the future generations. Higher education based on the liberal arts is crucial to educating experts qualified to manage and administer social common capital and Mr. Abe was willing to risk his life to protect it. In other words, professional knowledge and expertise must be solidly backed by sense of ethics and human character. Only experts of such caliber can be trusted to administer and manage social common capital, or the common property of our society.

生はアメリカの教育使節団が来たときに文部大臣として感動的な挨拶をされました。「日本は過去における占領政策においてきわめて多くの失敗をした。その国の伝統と実情を無視し、自分勝手な政策を力によって強いたからだ。米国は日本が犯したのと同じ間違いを繰り返さないでほしい」と言われたのです。会場は割れんばかりの拍手で、

使節団の団長は壇上に飛び上がって、安倍先生に握手を求めてきたそうです。そのアメリカの使節団は、アメリカでジョン・デューイの弟子さんだった方々なのです。つまり、当時のもっともリベラルな教育を受けていたのです。だからこそ、安倍先生の信念に共感したのだと思います。安倍先生は、子どもの世代の

ことをすでに考えられていたのだと思います。教育者として次の世代のために何を残せるのか。安倍先生はご自分のお子さんを栄養失調で亡くされていて、それだけに先生の言葉には重いものがありました。私は「社会的共通資本」を管理運営していくには、専門家の知見や職業的規律が大切だと言いましたが、そのような専門家

を育てるためには、安倍先生が命がけで守ろうとしたリベラルアーツに基づく高等教育が大変重要だと思っています。すなわち、専門的な知識や技術が、高い倫理観や優れた人間的資質に裏打ちされるということです。そのような専門家でない、社会の共有財産である「社会的共通資本」の管理運営を任せることはできません。

個人的に接した人から 人の大切さを学ぶ

小林 宇沢さんの「社会的共通資本」という考え方は、新しいものだと思っていましたが、むしろ私たちの世代にとっては懐かしいものかもしれませんね。

宇沢 当たり前のことなのですね。人を粗末に扱わないということですから。貧困を解消したい。子どもの資質を伸ばしたい。人々の病気を治したい。子どもが伸び伸びと遊べる町をつくりたい。自然を大切にしたい

——社会的共通資本の考え方は、より人間的な、より住みやすい社会をつくるためにはどうしたらよいか、という問題を経済学の原点に立ち返って考えようという意図のもとにつくり出されたものです。ですから、官僚制度や市場原理のような非人間的なもので、それを実現しようとするのはもともと無理なのです。私はそれを経済学的に証明したいと思っています。

小林 宇沢さんは『経済学と人間の心』というタイトルの本を書かれています。人間の心を大切にしたい経済学も可能だということですね。

宇沢 フリードマンの考え方に代表される経済学は、小林さんの医学とは違って、蛇蝎のごと

く嫌われるものでね。そんな経済学に反発して書いたのがあの本ですよ。

もともとの経済学では、アダムスミスのように人間の心を問題にする人もいましたが、新古典派理論による近代経済学では、人間の心は経済とは何の関係もないということで、問題にされません。マルクス経済学にも人間がいなくて、階級しかありません。

小林 宇沢さんはもともと医学部志望だったそうですが、本来はあなたが医者になるべきだったのかもしれない。しかし、あなたはいま社会のお医者さんとして治療をなさっているのだと思いますね。ところで、子どものことを取り上げる経済学というのは、歴史的にはないのですか。

宇沢 ケインズの弟子でジョン・ロビンソンという学者がいるのですが、彼女は経済学の論文を書くときには子どものことを考えながら書けと強調されていました。でも学問の理論的な枠組みには入ってこないですね。

小林 入ってもいいような気がするけれど、ダメですか。

宇沢 近代経済学では、価格のつかないものは扱えないのですよ。自然環境にしても子どもに

しても同じです。値段がつかないし、市場でやり取りできないものでしょう。だからいつの間にか粗末に扱われてしまうのです。社会の共有財産は、自由財として好き勝手に利用するものではなくて、皆がもつとも大切に守らないといけないものなのですけどね。

小林 人を大切にするために、これからの世代の人たちが学ばなくてはならないことは何だと思われませんか。

宇沢 難しいことではないですね。個人的に接した人から、人を大切にすることの価値や喜び

を学んでいくことです。自分

のおばあさんでも、近所の人でも、友達でも、誰でもいいから大切にしていけることです。私は教師や医者には聖なる職業だと思っています。そういう職業を目指す人は、そのことを心してほしいですね。

小林 今日は良いお話をありがとうございました。ワインもチーズもとてもおいしかったです。

宇沢 こちらこそ、ありがとうございました。

(二〇〇五年十一月二十二日
宇沢邸にて)





巻頭対談
経済学と子ども
子どもを粗末にしない国にしよう
～社会的共通資本の視点～

Economics and Children:

The perspective of social common capital
for a nation that values children

Value of relationships through personal encounters

KOBAYASHI: I thought that your idea of social common capital might be something radical, but now it seems to be something rather nostalgic for our generation.

UZAWA: It's a matter of common sense, you know, in that it asserts that human beings should be valued and respected. We want to solve the problem of poverty, develop children's abilities, cure illness, create safe and stimulating communities for children, and protect the natural environment. What should we do to make society more livable and comfortable in human terms? The concept of social common capital asks this question and makes it a central one in economics. That's why the social common capital cannot be realized through bureaucracy, market principles, or other impersonal means. I am anxious to prove this proposition from the perspective of economics.

KOBAYASHI: Do you mean that an economic approach that takes the human mind into account is feasible?

UZAWA: There were actually some economists including Adam Smith who took the human mind into consideration. Modern economists, however, under the influence of neoclassical economic theory regard the human mind as irrelevant to the economy, and pay no attention to it. Marxist economists are not occupied with humans either, but only with social class. Among Keynes' followers, I recall that Joan Robinson emphasized the importance of considering children when writing about economics, but this does not necessarily mean that children were a factor in the theoretical framework of economics.

KOBAYASHI: Why not? It should be possible.

UZAWA: Unfortunately, modern economics cannot deal with factors that cannot be given a monetary value, and this applies to the natural environment and children. These cannot be priced and exchanged on the market. Maybe that's why they tend to be neglected. Common assets of society, to be sure, are not free goods that can be exploited wantonly, but something that we must protect dearly.

KOBAYASHI: In your opinion, what lesson should younger generations learn that will contribute to greater valuation and respect for human beings?

UZAWA: Nothing complicated. It is through personal contact with others that we come to learn the value and the joy of taking care of human beings. Try to care for people around you: your grandmother, your neighbors or your friends. In that sense, teaching and medicine are sacred vocations. I only wish that those who aspire to those professions will keep that in mind. (November 22, 2005)

Hirofumi Uzawa, D.Sc.

Born in Yonago, Tottori in 1928.

Professor Emeritus, The University of Tokyo

Member, The Japan Academy

Graduated from the Department of Mathematics at the University of Tokyo in 1951.

He has taught at several universities including Stanford and the University of Chicago. He also serves as Chair Professor of Advanced Study, United Nations University/IAS. The Order of Cultural Merit was conferred upon him in 1997.

Noboru Kobayashi, M.D.

Born in Tokyo in 1927.

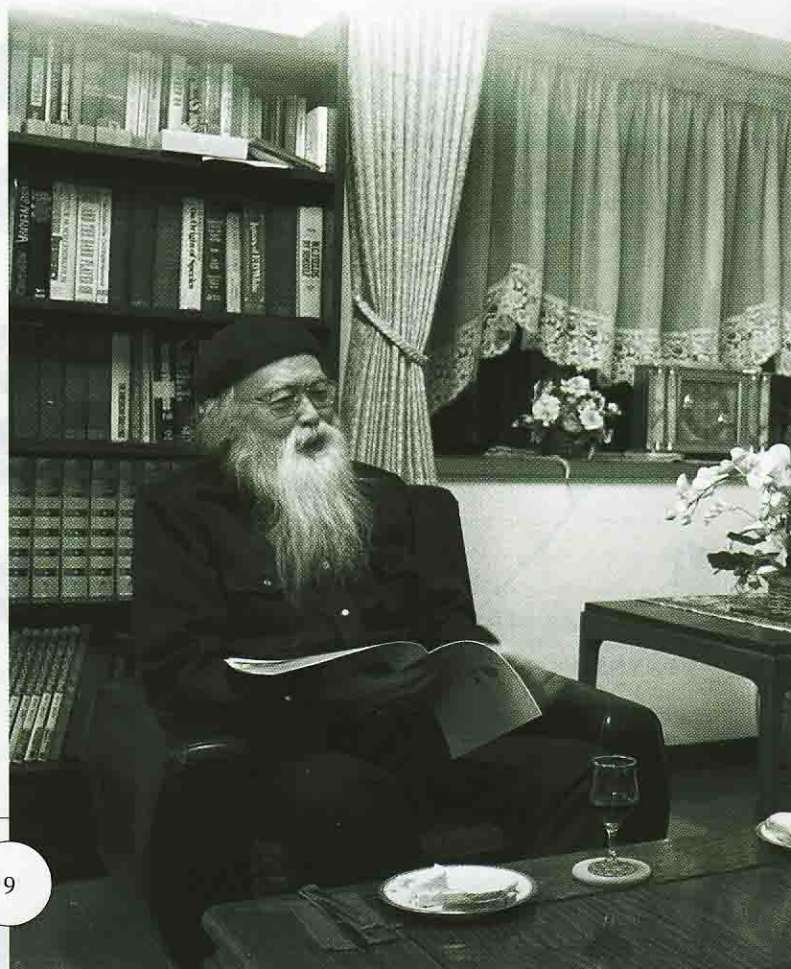
Doctor of Medicine, Faculty of Medicine, The University of Tokyo

Director, Child Research Net (CRN)

Professor Emeritus, The University of Tokyo

President Emeritus, National Children's Hospital

Director, Children's Rainbow Center (Japan Information and Training Center for Problems related to Child Abuse and Adolescent's Turmoil)



CRN

History of the past 10 years

10年のあゆみ



年月/出来事
Year / Event

Launched Japanese/English bilingual website
Symposium, "Children in Today's Multi-Media Society"

1996 日英二カ国語ウェブサイトオープン
シンポジウム「マルチメディア社会の子どもたち」

Symposium, "Children's Use of Multi-Media to Make Friends"
Dr. Jane Goodall visited and talked on "Chimpanzees and Natural Environment"
Dr. Jay Belsky visited and talked on parenting

1997 シンポジウム「中高生のデジタルな友達づくり」
ジェーン・グドール博士講演会
ジェイ・ベルスキー博士講演会

International symposium, "Augmented Childhood"

1998 国際シンポジウム「メディアは子どもをどう育てるのか？」

Open round-table discussion, "Classroom Disorder and Discipline"
Held PLAYSHOP 1999, "PLAYFUL"

1999 公開座談会「学級崩壊はしついでくいとめられるのか？」
プレイショップ「PLAYFUL」

Open round-table discussion, "How Do Children Learn Social Aptitude and Rules?"
Held PLAYSHOP 2000, "Feel the Media"
International symposium, "The Child Care Paradox: Choices in Children's Development"

2000 公開座談会「『学校』と『家庭』を結ぶもの」
プレイショップ「Feel the Media」
国際シンポジウム「21 世紀の子育てを考える」

Opened Nagayama Chi-kichi as a center for research
Held PLAYSHOP 2001
Began Sound Workshop(-03)

2001 研究拠点「ながやまチーきち」開設（～02年）
プレイショップ（「プレイフルストーリーをつくろう」など）
音のワークショップ（～03年）

Training seminar for child care providers, "Thinking about the Quality of Day Care"
Established the Research Groups on Child Science
Launched CRN Members Site (Japanese)
Held PLAYSHOP 2002

2002 CRN 実践保育研修会「保育の質を考える」
「子ども学研究会」（～03年）
CRN メンバーサイトオープン
プレイショップ（「カラフル王国で遊ぼう」など）

Inaugurated the Japanese Society of Child Science
Began Media Kids Workshop (-05)

2003 「日本子ども学会」設立
メディアキッズワークショップ（～05年）

First Annual Conference of the Japanese Society of Child Science
Established the Child Science Essay Contest
Visited child research institutes in China

2004 「第1回子ども学会議」（「日本子ども学会」学術集会）
チャイルド・サイエンス懸賞エッセイ
中国の子ども研究機関を訪問



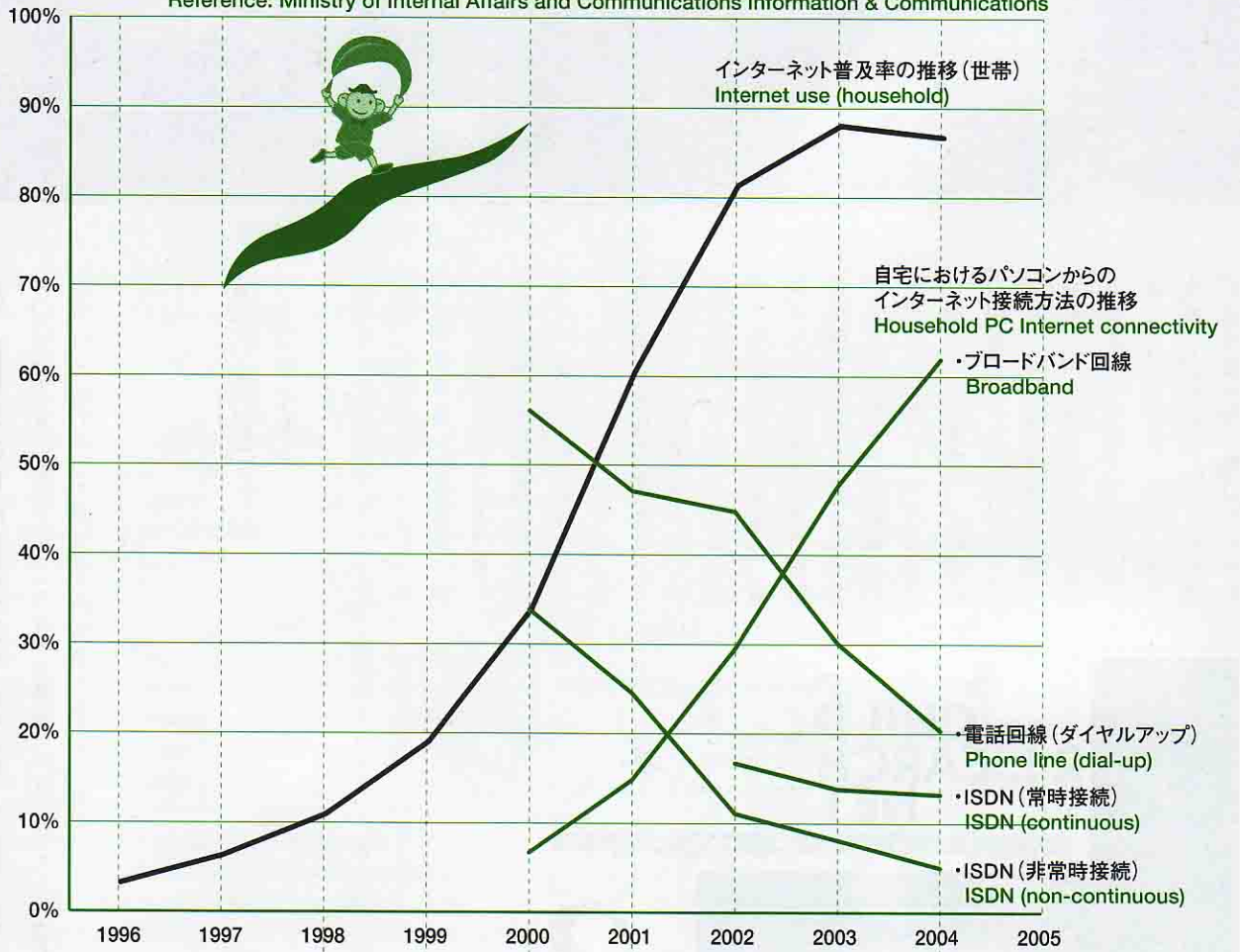
Launched Chinese-language website
First Child Science Research Groups Meeting of the Japanese Society of Child Science

2005 中国語ウェブサイトオープン
「第1回子ども学研究会」（「日本子ども学会」研究部会）



(出典)「通信利用動向調査」

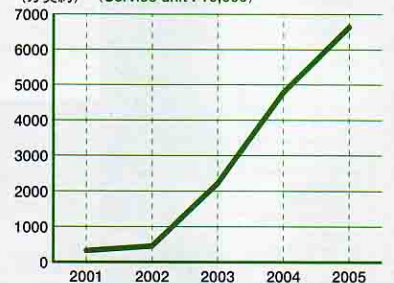
Reference: Ministry of Internal Affairs and Communications Information & Communications



ブログ、SNSが話題になる/
Blogs and Social Networking
Sites increase in popularity

Windows XP発売/
Windows XP released
ADSL一般向けサービス開始/
ADSL access expanded to general public

カメラつき携帯電話の契約数の推移
Camera mobile phone service subscriptions
(万契約) (Service unit : 10,000)



カメラつき携帯電話発売、
「写メール」が話題になる/
Camera mobile phones released.
Mobile phones with built-in digital
cameras create a new culture of
picture messaging

iモード発売/i-mode launched
OCNがADSLサービス開始/ADSL access released by OCN

Windows98発売/Windows98 released

(出典)「平成17年情報通信白書」
Reference: Ministry of
Internal Affairs and
Communications
Information &
Communications

Child Science Research Expanding Child Science with Chinese-language Website

CRN launched its Chinese-language website in February 2005. As our site grows in content, exchanges with Chinese child experts and researchers are also expanding.

Website as a Forum

Besides the latest information on Child Science from Japan, CRN's Chinese-language website posts a vast range of articles from experts on early childhood education in China. Backed by scientific data, this information on child-rearing meets the needs of parents who are concerned about how to better bring up and educate their only child. Access by parents as well as educators is increasing steadily.

China and Japan are, as they say, separated only by a narrow strip of water, and despite different circumstances, we have much in common when it comes to children's issues. CRN plans to expand website content to bring together parents, educators, and researchers and serve as a forum for research on children in China and Japan.

China-Japan Exchange in Child Science Research

Two researchers from China were invited to make presentations at the second annual conference of the Japanese Society of Child Science. Professor Jiaxiong Zhu of East China Normal University and Ms. Tian Hui, research fellow at China National Institute for Educational Research, spoke on early childhood education and care in China, providing participants with a valuable opportunity to learn about this field in China.

Following the conference, the participants, made up of specialists in developmental psychology, brain science, robotics, the cognitive sciences, and many other fields, attended a reception and enjoyed discussing their own research and child-related interests. The proximity of China and Japan allows us to easily meet for face-to-face exchanges that go beyond the usual website communication, and this has underscored the importance of talking about children's issues.

China Visit and Lecture

In October 2005, Dr. Kobayashi was invited by the Shanghai Soong Ching Ling Foundation of the China Welfare Institute to give the keynote speech at an international symposium on "Early Childhood Education in a Multicultural Society." The title of his address was "Joie de Vivre is Essential for Children, Anywhere and Anytime, Child Science of Emotion." Combining biological perspectives on children with education in a holistic manner, Child Science is generating interest in China where considerable national resources and much energy are now being devoted to education.



日中「子ども学」 研究者の交流

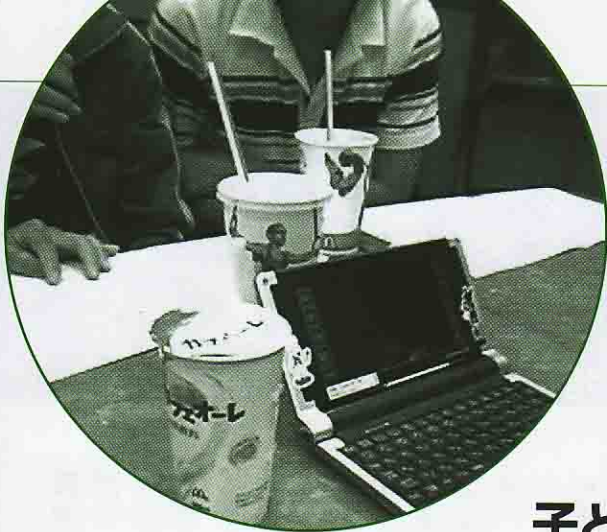
「第二回子ども学会議」(詳しくはP 18・19)にあわせ、中国より二名の学者を招聘し、日本で「子ども学」に関心を持つ研究者との交流を企画しました。来日されたのは、朱家雄教授(華東師範大学)と田輝研究員(中央教育科学研究所)。会議中には、「中国における就学前のケアと教育の発展と現状」についてご講演いただき、多くの参加者が中国の幼児教育について知ることができました。

会議終了後の歓迎レセプションでは、発達心理、脳科学、ロボット工学、認知科学など様々な分野の専門家が、自身の研究と子どもへの関心事を語るなど、活発なディスカッションがなされました。

「子ども学」と「児童科学」。ウェブを介した交流だけでなく、地理的な近さを活かし、日中いずれかの地で共に集い、子ども問題を語ることの大切さを実感しました。

CRN 所長訪中講演

中国福利会宋慶齡基金会の招聘で、二〇〇五年十月に上海で行われた国際フォーラム「多文化共生を背景とした幼児教育」にて、小林登CRN所長は基調講演をしました。テーマは「Joie de Vivre 子ども達にとって「生きる喜び一杯」はいつでもどこでも必須のもの、情動の子ども学」。子どもの教育に国家を挙げて力を注ぐ中国。子どもを生物学的な視点から捉え、教育と有機的に結びつける「子ども学」に大変な刺激を受けたようです。



子どもとメディア研究 インターネットの中の子どもたち



Research on Children and the Media Children on the Internet

How do children and young people learn new media and make it a part of their daily lives? CRN conducts ongoing fieldwork on teenagers, and our findings continually show us how creatively they use the Internet to have fun, learn, and communicate.

創出される ネット子ども文化

子どものコミュニティサイト*2やブログ*3の調査からは、ネットで提供される無料のサービスや機能を利用し、さらに独自の使い方を編み出し、自由な発想で自己表現をする子どもたちに多く出会いました。部活や塾、習い事に追われ、通学にも時間がかかる子どもは少なくありません。限られた時間のなか、現実の友だち付き合いをネット上にも拡大させているのです。今の子どもたちにとっては、リアルな人とのつながりとメディアを介したつながりとは同等で区別がありません。

遊ぶとなれば徹底的に遊ぶ子どもたち。ネットも例外ではありません。文字やフォントを組み合わせた暗号のような文、落書きして遊んだ写真、自作のゲーム、いろんな機能を盛り込んだブログ、子どもたちの創造力豊かな作品には驚かされます。また、日記を書くことでいじめられているストレスを解消している子も少なからずいます。

家にあるから、タダだから、 便利だから

四月から子どもへのインタビュー調査*1を始めました。「家にあるし、タダでゲームとか音楽を楽しめるし、何でも載ってるし。便利だよ。」子どもたちがインターネットを使う理由は明快。メールアドレスやホームページはどうしたら作れるのか、どこにもおもしろいページがあるのか、迷惑書き込みの撃退方法、これらは友だち付き合いのなかで自然と身につけた知識のようです。



パソコンは親が使っているのをみて、なんとなく使えるようになった。一日一時間って約束、ちゃんと守ってるよ、夏休み中も。

友だちがホームページをつくっていて、無料でつくれる場所を教えてもらった。五年生のとき。ここは使いやすい。チャットもやるよ。長崎の事件があったから親にチャットは使っちゃいけないっていわれたけど、友だちに聞いたら大丈夫って。チャットは自分のホームページとか友達のホームページとかでやる。チャットやるよと連絡はメールで送ってくる。何月何日にやるよ、出られない人は連絡してねって。

ホームページはつくりはじめて半年。最初は友達と一緒にやってたけど、いまは一人で。日記書いて、絵を書いて貼ったり。掲示板もあるよ、五、六人くるかな。ランキングとかに登録してるといやな書き込みとかがあるんだって。自分はそういうところに登録してないから来ない。学校の友達しか知らない。

(Nちゃん。東京都在住。小六女)



In our survey begun in April 2005, we interviewed children on why they used the Internet. Their answers were quite clear: "Because we have it at home and I can play games and listen to music for free. It has everything!" When it comes to questions about getting an e-mail address, making a personal home page, interesting sites, or how to avoid spam, they just ask their friends. The Internet is part of their social life.

I started my own site six months ago. A friend helped me at first, but now I can update my diary, post my own drawings, and do everything myself. About five or six people visit my bulletin board. I'm not linked to other sites, so I don't get any strange messages. It's a site just for my friends.
(N, 6-grade girl, Tokyo)

Surveys of children's community sites and blogs indicate that they are very inventive when it comes to expressing themselves with the free services offered on the Internet. Their lives are full of club activities, cram school, after-school lessons. Even commuting to school can take time. But during their limited free time, they cultivate friendships through online communication. For them, there isn't any difference between socializing face-to-face and via media.

CRN will follow up on these children as they grow with the changing Internet environment. What will they be doing and feeling when they enter junior high school?

かみ募集の日記見てみ!!!!

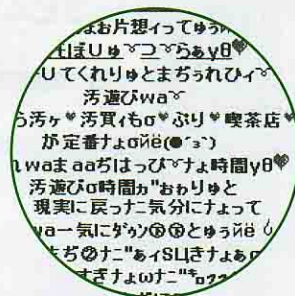


明日もあるんだけどね。
私はですね、明日カラ、いい◎ばあ◎の家にいってねえ。
だから、今日で最後やったよ。



今日から、じいばあの家いくんで
早くても7月6日までオカエこれんのですねえー。
もしかしたら、じいお家のPC使えるかもしれんけど...

ほんと、お久やなああ
みんなア、元気してたあ??
ウチワ、いちめでも元気よん♡
ウチのワタ たまに、のぞいてね☆

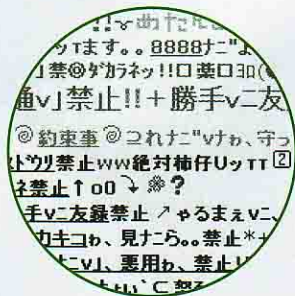
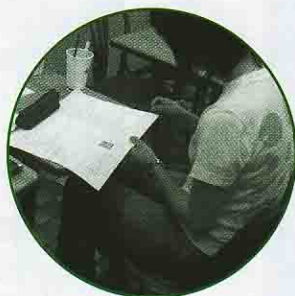


インタビューした子が中学生になったとき、どんな話をしてくれるのだろうか？ ネット環境の変化とともに成長していく子どものその後も、今後は追ってみたいと考えている。

CRN「子どもとメディア研究室」調査研究
(担当:外部研究員 河村智洋、川上真哉)

- *1「100人のティーンへのインタビュー」
(2005年4月～9月)
- *2「子どものコミュニティサイト研究」
(2004年7月～)
- *3「中高生のブログ研究」
(2005年10月～)

詳しくは
<http://www.crn.or.jp/LABO/index.html#001>



法の多様化

ネット上で提供される無料サービスを利用して、デザインのにも機能的にも優れたウェブサイトを個人が気軽に持つことができるようになりました*1。「インターネットを活用し、子どもについて調べる・探す・議論する場を提供する」ためにCRNサイトが設立されて10年。様々な情報発信方法に挑戦しています。

<http://www.crn.or.jp/>

メルマガ

CRNメンバー登録者を対象に、更新情報を毎月配信しています。また、無料のメルマガ配信ツールを利用して、「子ども学」や手作りに関するメルマガも不定期で配信しています。

ブログ

外部研究員の研究日誌やCRNスタッフの業務日誌などのブログを公開。「ティーンズネット」では中高生のブログランキングを実施しています。

Podcast

フォーラム「子どものファッションを話そう」や小林登文庫を素材に、試作番組を制作しました。

(注) これらは試験的な取り組みのため、予告なく変更・中止されることがあります。

MEMBERS

*研究室の一部と会議室(フォーラム)の利用にはCRNメンバーへの登録が必要です。

*1 例えば、2005年3月末時点の国内ブログ利用者は延べ約335万人、うち少なくとも月に1度はブログを更新しているユーザー数は約95万人。(総務省・2005年5月)

お勧めコンテンツ

ドゥーラ研究室

妊娠・出産・子育てにおける母親とその家族へのエモーションサポートを考えるうえで、ドゥーラ(Doula)に注目し、その歴史や効果、現状などの研究情報を収集し、紹介しています。

中国幼児教育レポート

中国の教育事情、とりわけ幼児教育に関する実情や様々な社会現象・問題点について、現地発の生の情報をレポート。中国語版サイトとの連動企画です。

English site



Web Community Research



New Information

情報発信方

CRN renewed its English site in June 2006. Our users are sure to find it easier to learn about Child Science and our activities in Japan. And it is more convenient than ever to search our deep database for research reports, data, and information on international conferences. With voting functions, users can let us know what they think of a particular issue. We plan to add more information on China to what we now offer on Japan.

<http://www.childresearch.net/>

Recommended

Let's Vote!

This quick online survey tells us our user's diverse views on child issues and creates an opportunity to chat about the collected results. Let us know how you feel.

Internet Kids Project

CRN believes it is necessary to find out how children actually use the media in their daily life. Internet Kids Project includes data and reports that cover media use among children.

Child Science

Introduces academic papers, documents, articles on Kodomogaku, Child Science by Noboru Kobayashi, Director and pediatrician.

Resources

Research reports, data, and other academic papers on child-raising, child care, and education

Child Research in Japan & Asia

Articles on education, child rearing, and child-related issues in Japan and Asia, and selected translations of CRN Japanese and Chinese-language reports.

Projects

Workshops and activities with children. Includes essays and photographs by children.

Links

Over 180 links to organizations and institutions engaged in children's issues, education, developmental psychology, neurology, social welfare, media, etc.

Message Boards

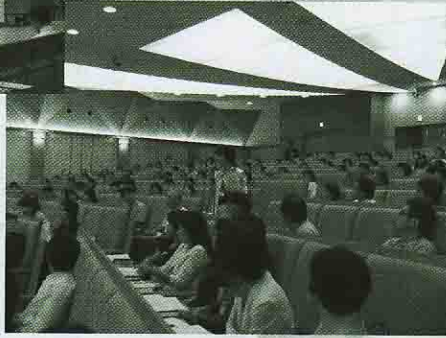
Everyone is welcome to discuss topics and issues related to children.



トピックス

第2回子ども学会議開催 「多文化社会と子どもたち」

～未来をつくる共生と支援～



21世紀、多文化の中で生きる子どもたちのために、
「均衡モデル」から「葛藤モデル」へと発達観をシフトする



日本子ども学会は二〇〇五年九月三日（土）、四日（日）に、東京大学大学院医学系研究科教育研究棟（本郷キャンパス）で学術集会を開催しました。

今大会のテーマは「多文化社会と子どもたち～未来をつくる共生と支援～」。在留外国人の増加、海外で暮らす日本人の増加を考えた時に、文化間を移動する子どもたちがどんな発達を遂げるのかは、子ども学の新しいテーマのひとつです。これまでの子ども研究は単一文化で育つ子ども中心でしたが、二十一世紀は多文化で生きる子どもの発達も重要な研究テーマになっていくものと思われ

ます。
大会冒頭の基調講演は、東京学芸大学の佐藤郡衛氏による「多文化に生きる子どもたち」。単一文化社会の均衡モデルか

ら、多文化社会の葛藤モデルへの移行という教育発想の転換が示されました。特別講演では、最新の脳科学研究の成果を踏まえて、東京大学の酒井邦嘉氏が「第二言語習得と子どもの脳」、東京女子医科大学の岩田誠氏が「言葉を失う脳」について語りました。

初日のシンポジウムⅠのタイトルは「文化間移動と子どもの発達」。「第二言語習得の問題」「子どもの社会適応の問題」「多文化によって生まれる葛藤」などについて議論が交わされました。パネリストは関西学院大学の山本雅代、同志社女子大学の塘利枝子、神田外語大学のヒダシ・ユディットの3氏です。

二日目のシンポジウムⅡは「在日外国人の子どもの現状と課題」というタイトルで、

在日外国人の子どもたちの具体的な問題に目を向けました。法的な人権問題だけではなく、不就労の子どもや健康診断を受けない子どもなど、在日外国人の子どもたちの生活面でのケアについて考えました。現場をよく知る論者が、在日外国人の家族生活にまで思いが至らない日本社会の問題点や改善すべき点について検証しました。パネリストはお茶の水女子大学の箕浦康子、大阪大学の中村安秀、大阪弁護士会の丹羽雅雄の3氏です。

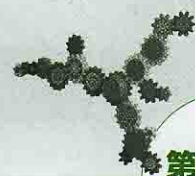
大会の最後には、中国から来日された田輝（中国中央教育科学研究所）、朱家雄（中国華東師範大学）のふたりの研究者が、東アジア地域における就学前の子どもたちのケアと教育について報告し、多文化社会にふさわしい国際交流の場として幕が閉じられました。



Topics

Second Annual Conference of the Japanese Society of Child Science
Multicultural Society and Children: Coexistence and Support for the Future

Child development in multicultural societies of the 21st century shifts from equilibrium to conflict model



第2回
子ども学会議

The Japanese Society of Child Science held its annual conference at the University of Tokyo on September 3 and 4, 2005 on the theme "Multicultural Society and Children: Coexistence and Support for the Future." This topic was both a new and timely one for Child Science as an increasing number of non-Japanese children now live in Japan and more Japanese reside abroad. Past research had tended to focus on children from the same cultural background, but this conference underscored the growing significance of the development of children in multicultural societies as a subject of research in the twenty-first century.

In his keynote address entitled "Children Living in a Multicultural Society," Professor Konoe Sato of Tokyo Gakugei University noted that education theory is shifting from the equilibrium model of a mono-cultural society to a conflict model of a multicultural society. Professor Kuniyoshi Sakai of the University of Tokyo gave a special address on "The Bilingual Child's Brain," based on the latest brain science research. Professor Makoto Iwata of Tokyo Women's Medical University spoke on "The Aphasic Brain."

Entitled "Developmental Problems of Children between Cultures," the first symposium discussed problems of social adaptability and conflicts that emerge in multicultural contexts with three panelists: Professor Masayo Yamamoto of the Graduate School of Kansai University, Associate Professor Rieko Tomo of Doshisha Women's College of Liberal Arts, and Professor Judit Hidasi of Kanda University of International Studies.

The second Symposium on "Non-Japanese Children in Japan: Current Situation and Support" discussed the specific problems faced by non-Japanese children in Japan. Besides legal issues of human rights, these included support for unemployed young people, children who do not receive health checkups, and other necessary daily life assistance. Those familiar with the issues pointed out both the neglect of these non-Japanese families by Japanese society and also areas for improvement. The three panelists were Adjunct Professor Yasuko Minoura of Ochanomizu University, Professor Yasuhide Nakamura of Osaka University, and Masao Niwa, Attorney, Osaka Bar Association.

The conference concluded with presentations by two researchers from China, Tian Hui of China National Institute for Educational Research and Professor Jiaxiong Zhu of East China Normal University who discussed support programs for early childhood education in East Asia. This exciting and stimulating exchange was a truly appropriate ending for this conference on multicultural society.

■会場 東京大学大学院医学系研究科教育研究棟
■期日 二〇〇五年九月三日(土)、四日(日)
■後援 厚生労働省
■プログラム

九月三日

○基調講演「多文化に生きる子どもたち」佐藤郡衛(東京学芸大学国際教育センター教授)
○特別講演 脳科学と言語
「第二言語習得と子どもの脳」酒井邦嘉(東京大学大学院総合文化研究科助教授)

「言葉を失う脳」岩田誠(東京女子医科大学神経内科主任教授)

○シンポジウムⅠ「文化間移動と子どもの発達」

座長 佐藤郡衛

パネリスト

山本雅代(関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科教授)

塘利枝子(同志社女子大学現代社会学部現代子ども学助教授)

ヒダシ・ユディット(神田外国語大学国際コミュニケーション学助教授)

九月四日

○シンポジウムⅡ「在日外国人の子どもの現状と支援」

座長

パネリスト

牛島廣治(東京大学大学院医学系研究科発達医学教授)

箕浦康子(お茶の水女子大学開発途上国女子教育協力センター客員教授)

中村安秀(大阪大学大学院人間科学研究科教授)

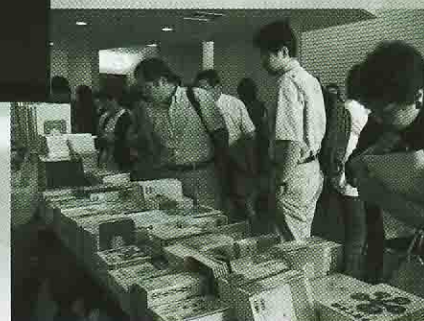
丹羽雅雄(大阪弁護士会・弁護士)

○特別講演「東アジア地域におけるECE (Early Childhood Care and Education) 就学前のケアと教育の展開と現状」子どもの権利保障をめぐるさまざまな取り組み」



多文化時代の幼児教育の課題

大阪府教育委員会 幼児教育研究センター
大阪大学大学院 教育学部
早稲田大学





Research Plans for FY 2006

2006年度の活動予定

After a decade of activity, CRN's website has established a solid reputation. Interest in Child Science is strong and growing. Amid the explosion of information on the Internet, CRN offers free access to reliable research reports, data, and other welcome resources for researchers of children's issues, child care professionals, and caregivers. With the founding of the Japanese Society of Child Science, we now bring together a wide range of specialists on media, play, child raising, and other topics of Child Science.

CRN will celebrate its tenth anniversary with commemorative activities in FY2006. These include exchanges with researchers in East Asia. Despite environmental differences, Japan, China, Korea, and Taiwan are all experiencing a declining birthrate, and an upcoming symposium and other events will address how child raising is affected by this phenomenon. Using broadband and the latest sound and image technology in our Internet conferences and networks, we will address child-related problems together and seek solutions that will make a difference in children's lives.

In April 2006, CRN will move from the suburbs to the heart of Tokyo, where we will share our location with another Benesse Corporation research institute established to study a wide range of parenting issues. This will open up new possibilities of coordination and cooperation in research. Along with us, we hope that you will look forward to our future activities as we begin our second decade.

設立から10年の活動を経て、CRNサイトへの信頼と「子ども学」への関心の高さを実感しています。インターネット上に様々な情報があるなか、専門家による豊富な研究レポートや調査データを無料で利用できることは、子どもに関わる仕事や研究に従事する方や子育て中の方から多くの支持を受けています。また、メディア、遊び、子育てなどをテーマに「子ども学」研究を進めてきましたが、「日本子ども学会」設立により、様々な分野の識者が参画し、「子ども学」研究を進展させる環境が整いました。

このような現状を踏まえ、2006年度はCRN設立10周年の記念行事を予定しています。一つは東アジアの子ども研究者との交流です。背景は異なるとはいえ、日本・中国・韓国・台湾はともに少子化傾向にあり、そのような環境のなかで育つ子どもについて共に考えるシンポジウムを企画しています。もう一つはインターネットを活用した子ども関係者との交流です。ブロードバンドの普及と様々な技術の創出により、動画や音声のネット配信やオンライン会議が容易に実現可能となりました。CRNならではの取り組みができないか、考えています。研究や議論の対象となる子どもたちとは、プレイショップ、「ながやまチーきち」（新しい学びと遊びの研究拠点）、インタビューなどを通して交流してきましたが、子どもへの研究の還元という視点からも、引き続きこのような活動に取り組んでいく予定です。

2006年4月には、慣れ親しんだ多摩センターを離れ、神保町に事務局を移転します。1月に設立された（株）ベネッセ次世代育成研究所とオフィスを共にしますので、連携・協働した研究活動も生まれてくるでしょう。新たな環境で、次の10年につながるCRN11年目を迎えられることに感謝しつつ、今後の活動にご期待くださればと思います。



読者より

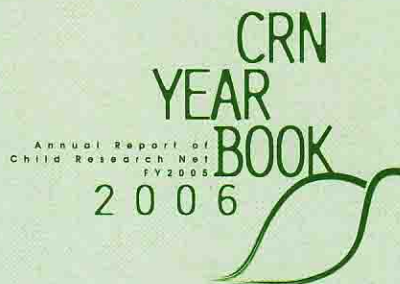


～CRNに期待すること／From our readers on CRN's future 『CRN YEAR BOOK 2005』読者アンケートより～

- Scientific verification of the practical knowledge and experience of child care professionals (University professor)
- Child Science from the perspective of children as our future, not just in terms of the declining birthrate as a national crisis or economic issues (Nursery school owner)
- Research on the fun and wonder of child raising, rather than the difficulty (Company employee)
- Besides research on media and children, recommendations on specific media (Private tutoring school owner)
- Building a network to promote links between medicine and education and sound child development (Physician)
- Cooperation with international children's organizations to save children from the ravages of war. CRN's network has the potential to disseminate information to a wide range of concerned people. (University professor)

- 地道に保育をしている方々の尊い実践的知識を科学が正しく評価してほしい。(大学教員)
- 少子化が国策や大人社会の経済的な視点で取り上げられるのではなく、子ども＝未来という視点での「子ども学」の確立を。(幼稚園経営)
- 今は子育てが難しい時代だと思います。少しでもその難しさを楽しさ、すばらしさに変えていくような研究活動を期待します。(会社員)
- 子どもとメディアの関係について、研究だけでなく提案ができる媒体を期待します。(教室経営)
- 医療と教育の連携、健全な子どもの発達を促すためのネットワーク作りを。(医師)
- 戦争の被害を被る子どもたちを一日も早くそのような状況から救い出したいと思っておりますが、子どもを育て、守る知識・技術の基盤となる科学に関係者に広く知らせることがこのネットでは可能だと期待しました。関係国際機関との協働を期待致します。(大学教員)





CRN YEAR BOOK 2006

Annual Report of Child Research Net FY 2005 (April, 2005-March, 2006)

発行日/Date

2006年(平成18年)3月31日/March 31, 2006

発行/Publisher

チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)

..... 4月16日まで

〒206-8686 東京都多摩市落合1-34 (株)ベネッセ次世代育成研究所内

電話042-356-0685 ファックス042-356-7306

..... 4月17日から

〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング (株)ベネッセ次世代育成研究所内

電話03-3295-0293 ファックス03-3518-2553

<http://www.crn.or.jp/>

Child Research Net

c/o Benesse Institute for Child Sciences, Parenting, and Aging

(~April 16)

1-34 Ochiai, Tama City, Tokyo 206-8686, Japan

Tel +81-42-365-0685 Fax +81-42-356-7306

(April 17~)

Jinbou-cho Mitsui Bldg., 1-105 Kanda Jinbou-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8685, Japan

Tel +81-3-3295-0293 Fax +81-3-3518-2553

<http://www.childresearch.net/>

編集スタッフ/Editing Staff

所 真里子/Mariko Tokoro

劉 愛萍/Aiping Liu

石井 直子/Naoiko Ishii

稲辺 まり乃/Marino Inabe

桜井 玲子/Reiko Sakurai

木下 真(木下編集事務所)/Makoto Kinoshita (KINOSHITA Editorial Office)

英訳/Translation

前堀 信子(トリスコープ・コーポレーション)/Nobuko Maehori (TRISCOPE CORPORATION)

サラ アレン/Sarah Allen

デザイン・イラスト/Design and Illustration

中村ヒロユキ(Charlie's HOUSE)/Hiroyuki Nakamura (Charlie's HOUSE)

落丁本・乱丁本はお取りかえします

Imperfectly bound and paginated copies will be replaced.

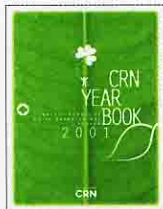
無断転載を禁じます

No part of this publication may be reproduced or transmitted in any form without permission of the publisher.

この冊子は再生紙でできています

Made from recycled paper

バックナンバー
B a c k N u m b e r

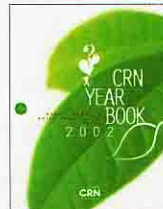


CRN YEAR BOOK 2001
Annual Report of Child Research Net FY 2000

巻頭対談：澤口俊之×小林登

「最新の脳科学は、子ども観をどう変えるのか？」

A Dialog between Toshiyuki Sawaguchi and Noboru Kobayashi
"How are Developments in Neurology Changing our View of Children?"



CRN YEAR BOOK 2002
Annual Report of Child Research Net FY 2001

巻頭座談会：麻生武×斎藤孝×小林登

「子どもは『心と体』で遊ぶ」

A Dialog between Takeshi Asao, Takashi Saito, and Noboru Kobayashi
"Children Play with their Minds and Bodies"



CRN YEAR BOOK 2003
Annual Report of Child Research Net FY 2002

巻頭対談：田近伸和×小林登

「未来のアトムは子どもを超えるのか？」

A Dialog between Nobukazu Tajika and Noboru Kobayashi
"Can the Future Astroboy Surpass the Human Child?"



CRN YEAR BOOK 2004
Annual Report of Child Research Net FY 2003

巻頭対談：持田澄子×小林登

「シナプスの微量物質が心と体のバランスを支配する」

A Dialog between Sumiko Mochida and Noboru Kobayashi
"Neurotransmitters: Microscopic substances at the synapse controls the balance between mind and body"



CRN YEAR BOOK 2005
Annual Report of Child Research Net FY 2004

巻頭対談：馬場悠男×小林登

「人類学と子ども：脳の巨大化とともに長期化した子ども期」

A Dialog between Hisao Baba and Noboru Kobayashi
"Anthropology and Child:
Prolonged childhood with brain enlargement"

(バックナンバーはこちらから注文できます。)
(<http://www.crn.or.jp/LABO/PUBLISH/>)



サイバー子ども学研究所

CRN

チャイルド・リサーチ・ネット

日本語版
Japanese-language website

<http://www.crn.or.jp/>

英語版
English-language website

<http://www.childresearch.net/>

中国語版
Chinese-language website

<http://www.crn.net.cn/>

チャイルド・リサーチ・ネットはベネッセコーポレーションの支援のもと、
福武教育振興財団の事業の一環として運営されております。

Child Research Net (CRN) is a non-profit, Internet-based child research
institute and operated as an activity of the Fukutake Education Foundation
under the auspices of Benesse Corporation in Japan.



5CC0000①